桐野夏生「天使に見捨てられた夜」論

中川智寛

桐野夏生は、「顔に降りかかる雨」（平成五年九月、講談社）で江戸川乱歩賞を受賞[1]、今日に至るまで、多彩な作品を発表している。本論文で取り扱う「天使に見捨てられた夜」は、乱歩賞受賞後の第一作であり、女性探偵村野ミロを主人公とする、所謂ミロ・シリーズの二作目に当たる。平成六年六月、講談社より刊行され、平成九年六月には同社から文庫化されていて、映画化[2]もなされている。

桐野は、特に長篇小説においては、作品ごとに新たな方法やテーマに挑み続けている作家であるので、本稿では、「天使に見捨てられた夜」を読み解くに当たって、前作「顔に降りかかる雨」には適宜論及するが、後続作品への影響を云々することに関しては、可能な限り抑制したい。「ＯＵＴ」（平成九年七月、講談社）以降、雑誌などで自作品に対する言及が特に増加した桐野夏生にあって、「天使に見捨てられた夜」への回顧は決して多い方とは言えないが、読者に与えられたヒントは皆無ではない。本稿では、この様な作家自身の言説も渉猟しつつ、作品の内実に迫りたい。

簡単に梗概を記しておこう。

村野ミロの元に、渡辺から一件の仕事が舞い込む。あるアダルトビデオに出演していた女性、一色リナを探し出して欲しいという依頼。リナが、ビデオ作品の中でレイプに近い扱いを受けていた為、渡辺は、リナを見付けた上で、製作側を告発する様に勧めたいという。

しかし、調査を進める内に、リナが続作での自傷行為により死亡したかも知れない、という情報が入って来る。渡辺の所には八田牧子という新たなスポンサーが現れ、リナ探索の為の資金は大幅に増額される。手掛かりは乏しく、ミロは、ビデオの企画会社や製作会社にも赴き、様子を探る。ミロは、ビデオのプロダクション元であるクリエイト映像の矢代に元々好意を持っていたが、情報を得ようと何度か接触している内に、遂に肉体関係に陥る。ある日、渡辺が不可解な転落死を遂げる。矢代が犯人である可能性もある為、ミロは後悔の念にも駆られる。ミロの調査には、隣人であるトモさんこと友部秋彦が協力し、ミロの精神的な支柱ともなる。

これらの途上で、ミロは何度か、嘗てのブルース界のスター、富永洋平が絞殺されたというニュースを耳にする。富永の葬儀の模様をテレビで見ていたミロは、棺に妻が手向けていた奇妙な瓶が、ビデオの中の一色リナの部屋にもあった事に気付く。

無関係に思われていた幾つかの出来事が、事件の収束へ向けて、一本の糸に繋がって行く。

I

「OUT」や「柔らかな頬」（平成十一年四月、講談社）の影に隠れて目立たないが、「天使に見捨てられた夜」への作者桐野の思い入れは、決して浅くはないと思われる。典型的な発言を引用しておこう。

『天使に見捨てられた夜』は、私の好みが出ていると思います。前半と後半が捩（ね）じれていく。『天使に見捨てられた夜』は自分の小説という感じがする。[3]

しかし、桐野は同じインタビューで、引用部に先立って、次の様にも述べていた。

ミロは私にとって、ジャンルを引きずり、一生懸命書いても、自分自身も読者の評価もわからないところへ行っていて、嫌なもの、辛いものになっていました。ミロをリアルな人物にし、迷う人にしたからうざかったし、そのリアリティが受け手の考えるものと微妙に違ったのだと思います。例えば、『天使に見捨てられた夜』ですが、三十二歳の女が魅力的な男に出会ったら、職業倫理を貫けるかどうか、対立する関係にある男と寝たりする軽はずみなところもリアルだと私は思いました。しかし、何かに抵触するのです。ハードボイルドの掟のようなものに。私は主人公が迷うことも、男と寝ることも、すべてハードボイルそのものだと思っていた。違和感で世界を切り開いて突き進んでいくことがハードボイルドだと考えていたから。

乱歩賞受賞前後の作家の苦悩と、以降の跳躍の可能性の、双方とが伝わって来る内容である。

「顔に降りかかる雨」において、村野ミロの人物像は、一通り明らかにされていた。父村野善三の後を継ぎ、小さな探偵事務所を営んでいる事、かつては博夫という夫がいたが自殺した事、その自殺の原因が、ミロな僅かな出来心による不倫である事、など。本作では、ミロの背負う負の部分が、ストーリー展開に伴って、驚く程露呈されているが、それは、次の様に端的に言い表されていた。

早く言えば、村野ミロは一つの愛情関係を形成するのに失敗した女性として、登場しているのである。先に、女性探偵物では〈カッコいい女性像〉が探求される、と書いたが、生活面でのミロは決して颯爽としたスーパー・ヒロインではないばかりか、「不倫などするいやらしい女」と反発を抱く読者もいるだろう。

シリーズ第一作目においては、気にすまいと思えばさほど気にしなくてもすむ、ミロのそうした生身の部分が、第二作目である本作では見過ごしようのないかたちで描かれる。即ち、ミロは調査の対象である男性・矢代に惹かれてベッドをともにするが、それは探偵の禁則を犯す行為である上に、結局はミロに幸福感をもたらしもしない。ミロはまたしても恋愛あるいは性愛の面で失敗するのである。(4)

「またしても」というのは、「顔に降りかかる雨」におけるミロと成瀬との関係を示している。

通常、ミステリー作品においては多く犯人役に求めるであろう人間の性悪的な部分、脆弱な部分を、作者は「天使に見捨てられた夜」においては、主人公に植え付けた、という事になる。ミロは自身の不義などの過去を読者に開示しつつ、事件解決へと邁進する訳だが、これが、あるいは、多くの読者の共感し得る理由の一つであるのかも知れない。(5)

前述の松浦に見られる様に、「カッコイイ」という形容詞は、村野ミロにも、そして、桐野夏生という作家へも向けられている。しかし、単なるスーパー・ウーマン的な事件解決者として仕立て上げるのではなく、人間が本来持っている欲望、また、その渇欲に苛まれもする主人公を描く事で、作品が紋切り型のサスペンスに堕しない様にも作られている。

Ⅱ

前章で述べた事は、桐野作品に度々現れる異形的性愛、即ち、SMや死体愛好、と言った問題にも接続される。「顔に降りかかる雨」でも、SMショーや死体を愛好し、それを写真に撮る人物などが描き出されていたが、「天使に見捨てられた夜」においては、一色リナ出演の二作目、『学問ソシテ、ジサツノススメ』における自傷行為、あるいは、死体のビデオを撮る事をリビド片山に発案する矢代の存在などが、それに当該しよう。

この、従来の性規範からの逸脱の描出は、広く見れば、ミロの良き相棒的存在であるトモさん（友部秋彦）にも認めら

れる。男性でありながらも性的志向も男性に向かうトモさんは、ミロについての短篇集である「ローズガーデン」（平成十二年六月、講談社）にも多く登場し、種々の難事件解決に向けて重要な役割を担う。従来の性の規定枠からの解放を体現しているとも言える。トモさんは、自己の来歴をミロに打ち明ける時、次の様に言っていた。

「二丁目には足を踏みいれたことがなかった。俺は結婚してたし、子供も一人いて、本当に普通のサラリーマンの男してた。このまま行けば、普通の男でいられたかもしれない。だが、これは本当の自分ではないと感じ続けて苦しんでいた。なぜなら、俺は女よりも男に欲望を感じていたからだ。だが、自分は同性愛かもしれないと考えると、実に恐ろしかった。外れている気がしたんだ。だけど、いつも、自分は自分の本当の人生を生きてないと思ってたし、罪悪感を抱えているほうが辛かった。（中略）で、とうとう意を決して、俺は同性愛者だと女房に打ち明けた」

（中略）

「そうじゃないかと思ってましたって言われて、一気に離婚話になったよ。会社じゃすごいスキャンダルになったけど、俺は会社もやめてすごい解放感を味わった。忘れられない味だった。（以下略）」（傍点中川）

今の自己に満足できない人間、言わば自己実現の未了に苛まれる人々の懊悩といったものが、桐野作品には度々見出される。

都会の片隅で、異形的性愛を生業として生きる人々の様子は、同時期の「愛のトンネル」（平成五年十月、「小説現代」、原題「天使のような私の娘」、短篇集「ローズガーデン」に収録）にも描かれていた。正確には、英会話学校の学生という表の顔の一方でＳＭクラブで女王として働いていた女性が、電車のホームで転落の巻き添えによる轢死を遂げ、その娘の過去を抹消するという仕事をその父から請け負い、その過程でミロが犯人を突き止めるに至る、というストーリーであるが、こ

の作品には、「天使に見捨てられた夜」と相通じている部分が多い。

稿者は仮に「異形的」と書いたが、屈折していると一般的には見られている性的志向を「異形的」とする眼差しの相対化をも、桐野の小説は我々に促す。

要するに、女が主人公のミステリでも、「男から見た女」というリアリティを書け、ということだと気がついた。編集部とは闘って場面は残したし、自由の萌芽もつかんだけれど、読者の毀誉褒貶が激しくて疲れたし、やはり「男から見た女」を求められるのも嫌だった。女を主人公にしたミステリの注文しかこないのも窮屈だった。それで、ミロの父親、村野善三の物語、『水の眠り　灰の夢』を書いた。(6)

読者の評価の揺れ、続作への動機、更には、しばらくミロを主人公にした長篇が書かれなくなった理由、などが吐露されていて興味深い。「編集部とは闘って」残した場面とは、引用部に先立っての部分から、やはり、ミロと矢代とが関係する場面だと知れる。作者がそこまでしてこの場面に固執したのは、やはり事件解決役である主人公を、旧来の範型に嵌め込むだけ、という事からの脱却を志向していたと考えられる。桐野は、自身が「ミステリ愛好家ではなかったから」、「ジャンルへの探究心もありながら、ジャンルに縛られて書けない世界があることもわかった」(7)と述べている。桐野のこの考えが、「天使に見捨てられた夜」発表時に既に芽生えていたかどうかは定かではないが、従来の鋳型の中に滞留すまい、という強烈な意図は読み取る事が出来る。それは、主人公や他の登場人物の造型法や、引いては、ストーリー展開にまで反映されて行った、と考えられる。

また、「天使に見捨てられた夜」を「まさに正統的なハードボイルド・ミステリ」とする見方もある。

ここには、声高に〝女性であること〟を叫ばず、しかしそれでいて〝女性私立探偵であること〟が必然性をもつ物語があった。文章は抑制が効いており、犯罪の背景となる風俗（アダルト・ヴィデオという、これほど広範に広がった風俗を扱ったミステリは、桐野の登場まで存在しなかった）は斬新だったし、全体として非常にていねいにつくられた清潔な〝ハードボイルド〟（©池上冬樹『水の眠り　灰の夢』評より）という印象をもったのである。

そしてそれ以上に、犯罪をめぐる〝状況〟への視線のたしかさと、悲劇的で静謐な余韻に、ぼくは驚かされたのだった。これはそこらへんのハードボイルドではない、良質の私立探偵小説、それも国産では希有な、ポスト・ロス・マクドナルドの私立探偵小説であると、ぼくは思ったのである。(8)

作者がジャンルからの解放を志向していた事が確かである以上、「天使に見捨てられた夜」に限らず、桐野作品のそれぞれを「ミステリー」や「ハードボイルド」といった一義的な形態で理解しようとする事自体が、あまり意味を持たない行為なのである。これらのジャンル、あるいはジャンルを定義する言辞それ自体が非常に可塑性に富んだものであるという事をも、桐野作品は読者に教示しているのである。

前述のジャンルの拘束からの解放という点と密接に関係があると思われるのが、イズムの峻拒とでも言うべき素描である。

例えば、フェミニストとして渡辺が描かれているが、渡辺については、作中において次の様に説明がある。

「渡辺さんは最初、がちがちのフェミニストだと思ったの。でも、どうやらそうでもないらしいことに気づいたわ。フェミニストの人は、アダルトビデオの問題には無関心だと言っていたから。フェミニストたちは、ＡＶ女優の問題に関しては相手にしないそうよ。つまり、それは出演者が好きでやっているのだから、自分たちとは違う地平だとい

うことらしいの。それから、外国のポルノ反対運動とも違うようだわ。渡辺さん自身は、性の商品化は自由だという考えみたいよ。（以下略）」

ここで、渡辺が典型的なフェミニストとしては造型されていない点に、注意を払わねばならない。単純なアダルトビデオ批判や、フェミニズムの推進という構造には、決してなっていないのである。

桐野が、旧来のミステリー小説の範型と自己の志向とをギリギリの所で均衡を保ったという事は、次の様な記述からも浮かび上がる。

小栗　『天使に見捨てられた夜』の松浦理英子さんの解説がとても面白くて、探偵自身、カメラ自身が犯人と想定される男の人と寝てしまって大失敗みたいなシークエンスが、やはりリアルだと思いますね。

桐野　そのほうが生々しいですからね。そういうことをしちゃいけないとそれも随分批判があったんですけどね。一つのお約束事を外していることになるんですね。でもそうしないと、ミロの痛みみたいなものもないわけで、そうすると答えを作り上げることも出来ないという気持ちはあったんですけどね。[9]（傍点中川）

しかし、「お約束事を外」れて行く力学こそは、「天使に見捨てられた夜」の読者達が体感するエネルギーの本質なのである。

桐野作品の根底が「抑圧からの破天荒な解放」[10]という見方が示されているが、桐野の作品構成力は、単なる「解放」という言葉だけでは回収し切れないものがある。作品によって登場人物達を種々の拘束性から解き放ったエネルギーが、言わば読者に再充塡され、その作品／読者間のエネルギー共有の持続性こそが、最大の特質なのである。そして、この共有

性は、不来方が言う所の様々な社会的「抑圧」の根源を考える旅程へと、読者を導き出して行くのである。

結語

桐野は、自身に影響を与えた作家として、ジェイムズ・クラムリーやスー・グラフトン、サラ・パレツキーなどを挙げ同時に、脱性規範的な実験性を認めてもいる。[11] この小説を書いている時の筆者は、「ハードボイルド」という言葉をかなり意識していた様でもある。それは「東京という街はらん熟していて、すごく面白いと思う」[12] 理由によって東京・新宿にミロの居住地を据えている事でも分かるのである。著者は、「セクシュアリティーに関する問題を取り上げてみたい」[13]、「性の問題は避けて通れない」[14] という意識があった事を述べているが、この様な意味からも、新宿二丁目が物語の舞台の一つとして選ばれた事は、必然であっただろう。「天使に見捨てられた夜」は、前作よりも更に、この新宿二丁目という地点を強力な磁場としつつ、性規範・ミステリー小説規範からの逸脱・解放という強力なエネルギーを放散するシステムが備えられているのである。

最後になったが、桐野作品の深層を探る上で示唆的な箇所を引用しておこう。

リナ出演の続作、『学問ソシテ、ジサツノススメ』についての情報を得た時に、ミロとトモさんとが会話している場面である。余計な説明はいらないだろう。

「ねえ、不思議な気がしないか」

「うん？」

「だっていつも、現実のほうが虚構の世界よりも、より残酷で信じられないことが起きるじゃないか。こういうこと

を小説に書けば、たぶんリアリティがないなんて言われてしまうだろう。でも、そういうことが、現実に起きる。そうだろう」

うん、と私はうなずいた。

注

(1) 小松史生子「桐野夏生」(浅井清・佐藤勝・篠弘・鳥居邦朗・松井利彦・武川忠一・吉田凞生編「新研究資料現代日本文学　第二巻　小説Ⅱ」、平成十二年一月、明治書院)によると、「顔に降りかかる雨」は、元々「小説すばる」に掲載予定であったものが、枚数を大幅に超過した為、乱歩賞応募へ切り替えられた、とある。

(2) 廣木隆一監督、小川智子脚本、配給は日活。平成十一年七月十日公開開始。かたせ梨乃が村野ミロを、大杉漣が友部秋彦を演じている。

(3)「スペシャル・インタビュー　ストイシズムは女を救えない　桐野夏生」(平成十四年十二月、「小説現代」)、「ダーク」発刊に際して行われたインタビューであり、雑誌の目次の当該欄には、「なぜ村野ミロの物語は五年もの間、書かれなかったのか。」とある。

(4) 松浦理英子「解説　村野ミロの自尊心、桐野夏生の勇気」(講談社文庫版「天使に見捨てられた夜」所収、平成九年六月)。尚、ルビは省略した。

他に、北上次郎「桐野夏生著「天使に見捨てられた夜」」(平成六年九月、「Marco Polo」、文芸春秋、「Books ミステリーはこれを読め!」の欄)は、人物造型法や前作からの進歩を高く評価し、「老舗(乱歩賞――中川注)の信用を取り戻す久々のスター作家になるかもしれない」と、的確な予言をしている。

(5) 与那覇恵子「桐野夏生　読者を魅了するカッコイイ女主人公の作り方」(女性文学会編著「すごい!ミステリーはこんなふうにして書く　傑作ミステリーを作り上げる作家たちの創作術」、平成十一年一月、同文書院)は、本作におけるミロのあり方について、「自らの浮気によって夫を死に追いやったというトラウマをもつミロの、自らが抱える切実な問題と対峙しながら事件の解決に向かう姿は、三十歳を超えた自立する女性の強さだけでなく、時にいい男に頼りたくなってしまう弱さもみせて、多くの女性の共感を

得た」としている。

(6)　桐野夏生「ジャンルからの自由」(平成十六年四月、「ポンツーン」、幻冬舎、日本推理作家協会編「ミステリーの書き方」連載第9回の中に収録、構成は池上冬樹)。

(7)　先掲(6)。

(8)　霜月蒼「日本作家招待席①／桐野夏生　評論／作家と作品　彼女たちの「卑しい街」」(平成八年七月、「ミステリマガジン」)。

(9)「女たちの孤独な戦い　インタビュー　桐野夏生」(平成十一年十二月、「ユリイカ」、聞き手は小栗虫太郎)。

(10)　不来方優亜「抑圧からの破天荒な解放者　桐野夏生」(株式会社D・C・L編集・構成「ヤミツキ！　探偵ミステリー読本」平成十六年一月、ぶんか社)。

(11)「『天使に見捨てられた夜』　著者に会いたい　桐野夏生」(平成六年十二月、「平成義塾」)。

(12)　先掲(11)。

(13)　先掲(11)。

(14)　先掲(11)。

＊テキストは講談社版(平成六年六月)によった。

(なかがわ　ともひろ　日本文化学)